

平成21年 6月2日	農作物病害虫発生予報 6月	山口県病害虫防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～	
I 予報の概要	1
II 予報	
【主要病害虫】	2
【その他の病害虫】	8
III 参考(予報の見方、気象予報、6月のテレホンサービスの内容)	9

I 予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	やや少	やや少	少
	縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	多	多	多
カンキツ	かいよう病	少	少	少
	黒点病	やや少	—	—
	ミカンハダニ	少	少	少
ナシ	黒斑病	やや少	やや少	前年並
果樹全般	カメムシ類	平年並	平年並	前年並

作物	担当者
普通作	藤村(病害) 中川(虫害)
果 樹	村本(病害) 殿河内(虫害)
野 菜	河村(病害) 溝部(虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

II 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや少	発病初期 (平年初発生時期：6月27日)

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の共同育苗施設（29施設）における聞き取り調査では、苗いもちの発生は認められず、平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では、6月の降水量は平年並みか少なく、日照時間は多い（－）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 発病した苗は移植しない。

イ ほ場に放置された補植用苗は伝染源となるので、補植が終わり次第、早急に処分する。

<防除判断>

ア 発病を認めたら直ちに防除する。

イ 6月22日頃に中山間地域を対象に長期予報を発表する予定である。

<防除のポイント>

長期持続型箱施用剤は、次の条件では効果が不安定になる場合があるので、これらの薬剤を施用したほ場でも発生予察情報に注意するとともに、ほ場の見回りを行い、早期発見、早期防除に努める。

(ア) 常習発生ほ場

(イ) 冷水があたるほ場

(ウ) 漏水ほ場

(エ) 苗いもちを持ち込んだほ場

(オ) 冷夏長雨

2 イネ縞葉枯病（イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカ）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
多	田植え時の箱施用剤施用 多発時には幼穂形成期までの本田防除

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬のコムギのヒメトビウンカすくい取り調査では、20回当たり成幼虫数は101.9頭（平年18.6頭）で平年に比べ多かった（＋）。

イ イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は8.0%（平年1.2%）で平年に比べ高かった（＋）。

ウ これまで、ヒメトビウンカの多飛来は認められていない（±）。

エ 気象予報では、6月の気温は平年並みか低い（－）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 休耕田はすき込み、畦畔の雑草は刈り取る。

イ ヒメトビウンカの増殖源であるイネ科雑草、イネ科牧草、麦類等の周辺で育苗しない。

ウ イネの生育初期に発病が認められた場合は、可能な限り発病株を抜き取る。

<防除判断>

幼穂形成期までに発病が多い場合はウンカ類に効果のある薬剤で直ちに防除する。

<防除のポイント>

ア 移植時には、ウンカ類に効果のある箱施用剤で防除を徹底する。

イ 昨年発生が多かった地域では、箱施用剤の処理にはプリンス剤等効果の高い薬剤を施用する。

ウ 箱施用剤の施用時には規定量の薬剤施用を遵守する。

エ 箱施用処理でプリンス剤を使用する場合は、魚毒性が高いため注意する。

オ ヒメトビウンカは6月以降多飛来することがあるので、今後の情報に注意する。

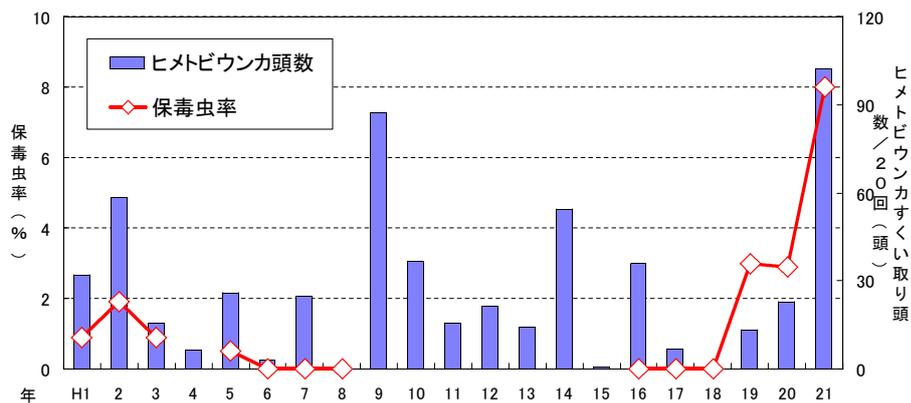


図 小麦のヒメトビウンカすくい取り頭数とイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率



イネ縞葉枯病



ヒメトビウンカの幼虫(上)と成虫(下)

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

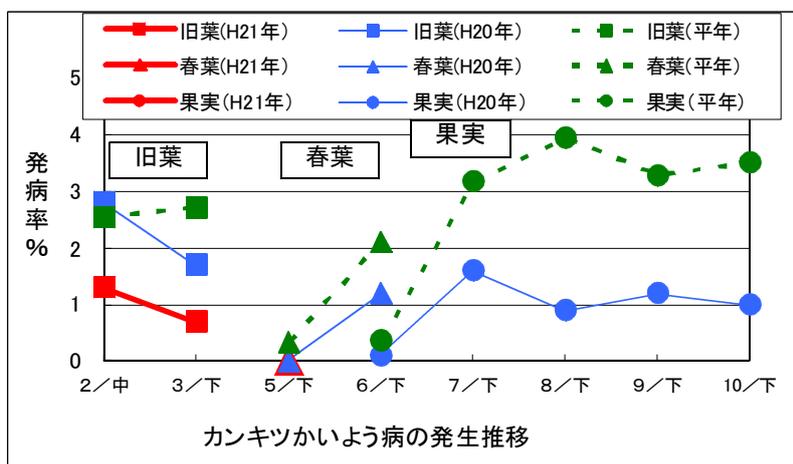
予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	6月上旬 6月下旬

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の越冬病斑調査では、発生ほ場率は9.1%（平年25.9%）、発病葉率は0.7%（平年2.7%）で平年に比べ少なかった（－）。

イ 5月下旬の巡回調査では、新葉での発生は認められず（平年発生ほ場率7.8%、発病葉率0.3%）で平年に比べやや少なかった（－）。

ウ 気象予報では6月の気温は平年並みか低く、降水量は平年並みか少ない（－）。



(3) 防除対策

<防除判断>

- 発病しやすい品種で開花後の防除を実施していない場合
6月上旬と6月下旬の2回防除を実施する。
- 発病しやすい品種で既に開花後の防除を実施している場合
6月下旬に防除を実施する。
- 発病しやすい品種と隣接した園やこれらを混植した園及び幼木園
温州みかんなどの発病しにくい品種でも多発することがあるので発生状況を確認し、発病が認められた場合には早急に防除する。

<防除のポイント>

- ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。
- イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風により枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。
- ウ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、葉害を低減するため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。
- エ ICボルドー66Dを使用する場合は、梅雨明け以降の夏季高温時の散布やマ

シン油乳剤との近接散布を避ける。
 オ ミカンハモグリガ（エカキムシ）の被害は本病の発生を助長するので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	—	—	1回目 : 6月上旬 2回目以降 : 累積降水量が250mmに達したとき または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

気象予報では6月の気温は平年並みか低く、降水量は平年並みか少ない(—)。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本なので、(1)の予報内容に記載された基準に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

枯れ枝は伝染源となるのでできるだけ除去し、園外に持ち出し処分する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	防除の目安を超えたとき 雌成虫の寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は18.2%（平年44.0%）、寄生葉率は0.3%（平年3.6%）で平年に比べ少なかった(—)。

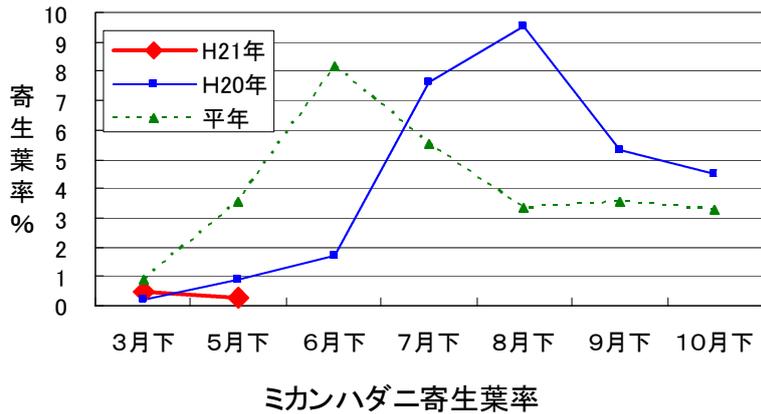
(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 発生量はほ場によって大きく異なり、特に交互結実園の生産樹で多発していることがある。また、気温の上昇に伴い急激に密度が増加することがあるため、定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ ハダニ類の天敵を保護するため、6月中～下旬にマシン油乳剤97%を散布する。但し、樹勢の弱った樹では古葉が落葉することがあるので避ける。

ウ 葉裏までムラなくかかるよう十分な薬量を散布する。



ナシ

1 黒斑病

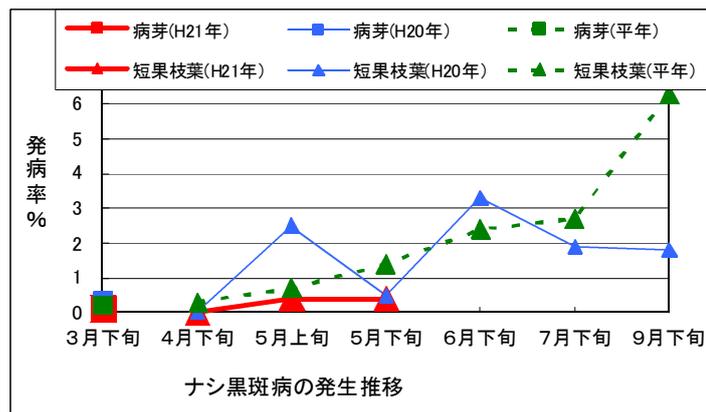
(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	大袋かけ前～ 大袋かけ後

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は50.0%（平年61.0%）、発病葉率は0.4%（平年1.1%）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では6月の気温は平年並みか低く、降水量は平年並みか少ない（－）。



(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 徒長枝の発病が多くなる時期であり、徒長枝の先端まで薬剤がかかるようにていねいに散布する。

イ 耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。

果樹全般（モモ、ナシ）

1 カメムシ類（チャバネカメムシ、ツヤカメムシ、クキカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	園地への飛来を確認した時

現況は予察灯調査による

(2) 予報の根拠

ア 果樹カメムシ類の越冬量と相関の高い前年のスギ、ヒノキの花粉飛散量が平年並みであったことから、果樹カメムシ類の越冬量は平年並みと考えられた(±)。

イ 予察灯(県内5か所、5月1半旬～5月5半旬合計)における誘殺数は、45頭(平年36頭)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

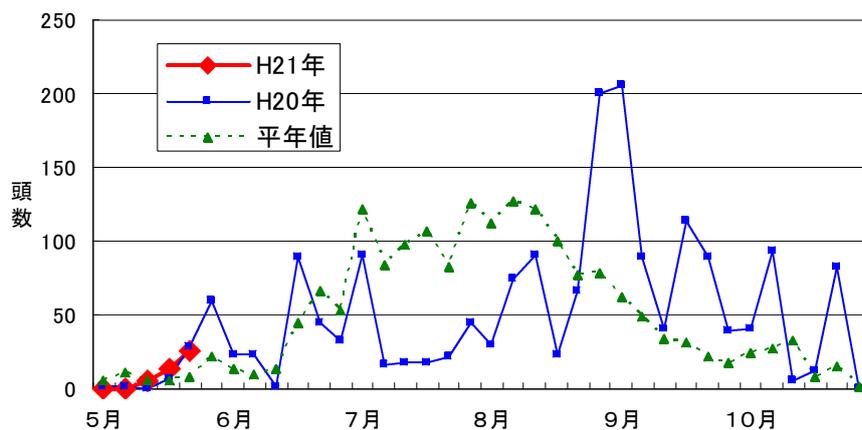
例年被害が発生する園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

<防除判断>

被害を受けることの多い園では、園内の発生状況や周辺の灯火を観察し、飛来がある場合は防除する。

<防除のポイント>

カメムシ類に対する飛来時以外の薬剤散布は効果がないだけでなく、ハダニやカイガラムシの増殖を招く場合があるため、スケジュール散布はしない。



果樹カメムシ類予察灯誘殺数の推移(県内5か所)

【その他の病害虫】

作物名	病虫害名	予 発 生 量 想 量	現 況		発生ほ場率		備 考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	イネミズ ゾウムシ	平年並	やや少	少	—	—	成虫密度が100株当 たり50頭未満であれ ば防除は必要ない。
	ニカメイ ガ	平年並	平年並 (予察灯)	前年並	—	—	(前年に巡回調査ほ 場で発生未確認)
カンキツ	そうか病	やや少	やや少	前年並	0	13.7	り病葉は見つけしだ い除去する。
ナシ	赤星病	やや少	やや少	少	0	18.0	
	黒星病	平年並	平年並	前年並	0	0	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（5月29日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い(%) 少 ない	平年並(%)	高 い(%) 多 い
気 温	40	40	20
降 水 量	40	40	20
日照時間	30	30	40

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	50	30	20
2 週 目	40	30	30
3～4 週 目	30	40	30

3 6月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	6月の発生予報、イネいもち病の防除、ダイズの種子消毒、カンキツ病害虫の発生状況と防除、ナシ黒斑病の発生状況と防除、イチゴ炭疽病の防除
中旬	イネいもち病の防除、果樹類病害虫の防除、侵入警戒病害虫
下旬	イネの葉いもちの長期予報、イネのウンカ類の防除、侵入警戒病害虫